

親じみのある七福神えびっさんのお祭り

えびす講と十日戎

新聞の折込にえべっさんのお面

「えべっさん」といえば、えびす講と十日戎。長浜や彦根あたりに住んでいる人なら、たいてい知っている。長浜では豊国神社、彦根なら北野神社とえびす神社が、えべっさんをお祀る神社として有名だ。

十一月の下旬になると、商店街ではえびす講にちなんだ大売り出しがおこなわれる。昔は、えびす講の時期に今号の表紙にあるような、えべっさんのお面が新聞の折込に入っていた。これが楽しみやったんやね。

お正月を過ぎると十日戎だ。えべっさんを祀る神社からは、鉦の音とともに「商売繁盛でササ持つてこい」という賑やかな掛け声が聞こえてくる。何か得ることがありそうだという期待感が膨んできて、自然に足がお宮さんへ向いてしまうのだ。

びす様、過去に複雑な生い立ちをお持ちの神様なのだ。

ワープロで「えびす」と打つと、恵比須、恵比寿、戎、夷、夷子、蛭子といろんな種類の文字が出てくる。語感はずいぶん異なる。恵比須や恵比寿という漢字は、めでたい文字があられたということがなんとなくわかる。

波瀾万丈の生い立ちのえびす神

しかし、戎、夷、夷子といった文字は、めでたい神様には似つかわしくない。蝦夷は、エゾ、エミシという読み方をしますが、辺境の野蛮な人たちを意味する言葉だ。というわけで、えびす様の由緒は、ひとつには辺境の地からやってきた荒々しい神様というのが、もともとのものであるようだ。

もうひとつは、蛭子という文字に由緒がある。国生み伝説のなかに、イザナギとイザナミという神様のあいだに手足の萎えた子とも、つまり蛭子が生まれたので、二人の神様がそ

の子を船に乗せて、風のまにまに捨ててしまわれたという物語がある。

ところが、鎌倉時代になると、捨てられた蛭子さんが摂津の国に流れ着いて海を領する夷三郎という神様になられたと語り継がれるようになる。これが西宮神社のえびす神というわけだ。

そんなわけで、えびす神は辺境からやって

きた荒々しい神様であったり、海を渡ってきた捨て子が神様になったりと、満面のえびす顔に隠された人生は、なかなか波瀾万丈なのである。しかし、江戸時代になると、そんな荒ぶる神様が、鯛を持った笑顔の福々しい神様に変身していかれる。大黒様とともに、七福神の代表神になってしまわれるのだ。そこからへんが庶民の知恵なのかな。

表でえびす神、裏で秀吉を祀る

えびす様は一月に稼ぎに出かけ、十月に稼いで帰ってこられるのだとされている。そんなわけで十月、ところによっては十一月にえびす講があり、一月十日に十日戎がおこなわれるわけだ。

そこで、長浜の豊国神社のえびす講と十日戎だが、まずは豊国神社のえびす神のことをお話しておこう。豊国神社は、その名とおおり豊国大明神、つまり秀吉さんゆかりの神社だが、徳川の世になると秀吉さんを祀るこ

とが許されなくなった。しかし長浜の町衆にとつて、秀吉さんへの愛着は深い。そこで、町衆は表でえびす神を祀り、裏では秀吉さんを密かに祀るという知恵を働かせた。長浜八幡宮にあったえびす神をお旅所へ移し、そのお堂で秀吉さんを祀つたのだ。そして明治になり、明治三十一年の豊太閤三百年祭を機に、現在地に立派な社が建設されたわけである。

宮司の尾崎忠磨さんによると、本殿には秀吉さんとえびす神が仲良く並んでおられるという。真ん中には秀吉さん、右手にえびす神、そして左手に加藤清正と木村重成という戦国武将が並んでいるらしい。これは尾崎さんしか知らない。神様のご開帳というのはいないから。これが、江戸時代には表にえびす神、裏に秀吉さんという並びになっていたということになる。

長浜の十日戎は四十年前から

えびす神は豊国神社のためまえとはいえず、商売繁盛の神様だから、祭礼は連綿と続けられてきた。十一月二十日を中心におこなわれる商店街のえびす講大売り出しは、昭和四十年代までは、街ながが身動きできないほどの人出で賑わった。

しかし十日戎の方は、神社での神事が細々と続けられるだけだった。長浜の商人は、今宮戎や西宮神社、若狭のえびす神社へお参りに行っていたという。

「長浜には、冬の祭りがなかったんですな。」



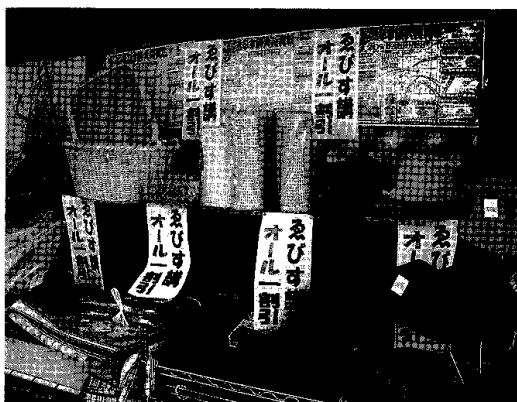
▲豊国神社の十日戎で街なかを練り歩く宝恵齋



▲豊国神社本殿前のえびす像



▲豊国神社宮司の尾崎忠磨さん

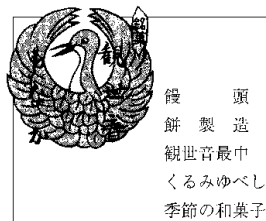


▲えびす講の売り出し中の店先

ばれい
巴無亭 JAZZ LIVE
62-5018 COUNTRY LIVE
GOLF COMPE

ポンの2階の
仲角集楽部
63-0029
長浜市大宮町3-12 長浜駅前通り

湖北観光情報茶屋四居家と福助さん



頭 製造
餅 製 最中
観世音 くるみゆべし
季節の和菓子

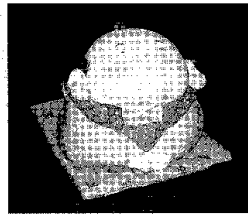
押谷製菓舗

東浅井郡びわ町川道
TEL 0749(72)2043

今年十月二日、アート・イン・ナガハマが開かれた日に、湖北観光情報茶屋・四居家がオープンした。長浜市の曳山博物館の北隣にある古民家だ。もとお住まいだった四居さんから長浜市へ寄付されたもので、新たに湖北の広域観光拠点としてオープンしたもの。

四居家が建てられたのは、およそ三百年前。元禄時代のころだ。京都府立大学の先生による調査でわかったのだが、長浜の町家ではい

▼広域観光拠点としてオープンした四居家



▲四居家の座敷机の上に鎮座する福助さん

ちばん古く、近畿でも最古級の町家だという。建物の外観をじっくり眺めると、ほかの町家との違いが見えてくる。二階がとても低い。江戸時代には、二階はせいぜい物置程度で、二階に部屋がある建物は少なかったのだ。屋根もほかの家に比べて、勾配がなだらかなだ。卯建も、この建物の大きな特徴。両側の切妻の壁が屋根より高くなっていて、その上に掛け庇のような瓦屋根が付いている。卯建の上があった家は、家格を表すシンボルなのだ。建物はトラデザインナルだが、湖北観光情報茶屋というだけあって、中へ入ると湖北の文化観光が解つたり、自由に休憩できたりするフレキシブルな空間だ。

土間の中央にデーンと据えられた五十センチのプラズマテレビでは、北近江浪漫交流圏委員会がつくった、湖北を紹介する映像が流れているし、湖北案内のパンフも揃っている。休日に四居家を訪ねると、少し驚くことがある。イケメンのアメリカ青年が、日本語ペラペラで出迎えてくれることだ。愛称ベン君、本名はベンジャミン・ジョンソン・ポティラーさん。マサチューセッツ州立大学日本語文学科の院生で、三番叟を研究するために滋賀県立大学へ留学中という。並みの日本人より、日本文化には造詣が深い。スッゴい！といった無国籍言語を乱発する日本の若者より、深

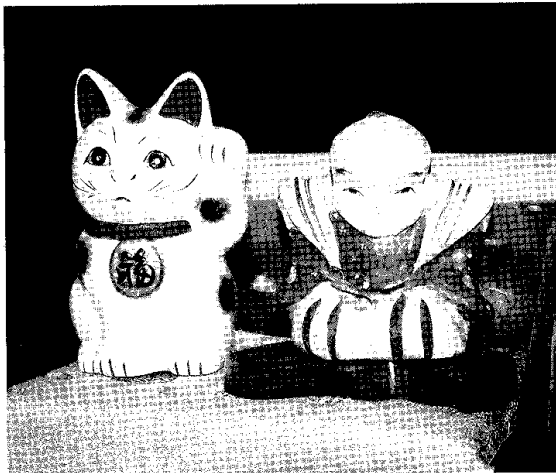
く分かり合えるだろう、たぶん。もうひとつは、大きな木の座敷机のうえに鎮座している福助さん。今年のアート・イン・ナガハマで、飯田市から来ていた美人の作家が売っていたもの。本誌スタッフのわたくしは、福助さんと飯田夫人に一目惚れ。「これはロクでつくったんです。きっと福が来ますよ」と言われ、四居家のオープン記念にプレゼントした次第。

四居家では、ときおり展覧会なども開いている。アート・イン・ナガハマのときには、花の絵を描き続ける地元作家、居弘美さんの個展会場になったし、三市物産展の際には、安土町在住の日本画家藤井靖子さんの絵画展が開かれた。

今後は、湖北のエコツアーや体験型観光の受入拠点としても活用される。また、湖北の民家紹介の展示や民家めぐり案内の情報提供、湖北紹介の本を集めたライブラリーも整備される予定だ。(西指人)

商店街の福助さん

前号の取材で十里街道を歩いていたとき、シヨウ・ウインドウに福助さんを何人か見かけました。これはきっと他のお店にもいるはずと、長浜の商店街をキョロキョロしながら歩いてみました。ガラス越しにちよいと失礼してパチリ！



▲一風変わったおじいさん顔？の福助さん。招きネコと一緒にお客様をお出迎え。(お漬物の絹兵さんの店先で)



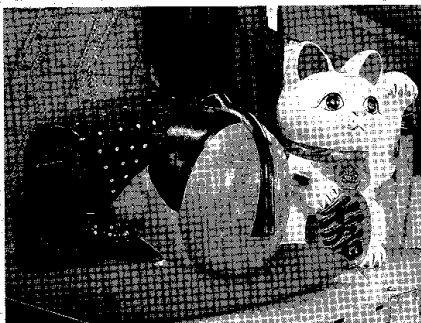
▲こちらはお福さんとツーショット。ふたり一緒に「いらっしやいませ〜」。なんとほほえましい光景です。(大手門通り めんるい吉野さんの店先で)



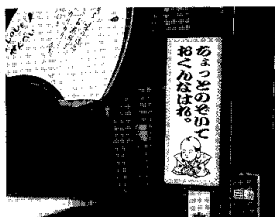
▲♪時のな〜がれに身をまかせ〜♪ お店と同じくらいの歴史を感じる福助さん。(長浜駅前とらや食堂さんのショーウィンドウで)



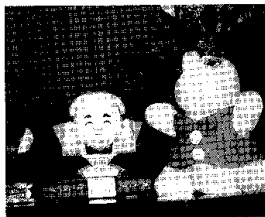
▲再び登場、楽しそうな二人連れの福助さん(十里街道で)



▲「は、はあ〜っ」深々とお辞儀をしてお客を迎えます。ちょっと顔上げてくださいな、と声をかけただけ、この姿勢をくずさない律儀な福助さんです。(ながはま御坊表参道 丸彦さんで)



▲シールにだって福助さん。「ちよっとのぞいておくんははれ」福助さんにそう言われたら、のぞかすにはいられます。(大手門通り 長浜船餅さんの入り口で)



▲鬼に金棒。福助さんに怪獣。これで怖いものなんかないまへんわあ。安泰！安泰！(北国街道 和菓子の吉川屋さんの店内で)